

琉球大学学術リポジトリ

日韓コミュニケーション： 相対敬語と絶対敬語の異文化コミュニケーション

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教養部 公開日: 2009-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼本, 円, Kanemoto, Madoka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13927

日韓コミュニケーション：相対敬語と絶対敬語の異文化 コミュニケーション

兼 本 円

0. はじめに

全ての国民がそうであるように日韓両国民も母国語を一番大切なものと思っている。自国語のことを日本ならば「国語」か「日本語」、韓国ならば「ウリマル」(「我々の言葉」)か「ハングンマル」(「韓国語」)と呼んでいる。さらに両文化が長幼の序を重んずる儒教と関ってきたことも広く知られているところである。そのためか両国民が自国語の中で最も美しく大切なものとだど信じてやまないものが敬語である。日本で敬語の使い方に関する一般向けの本を挙げるならば、大石初太郎の『敬語』、荒木博之の『敬語日本人論「礼」の言葉—敬語から日本的集団のダイナミズムを探る—』、『敬語を使いこなす』(野本, 1994)、奥山益朗の『日本人と敬語』、辻村敏樹の『敬語の用法』等と枚挙にいとまがない(この種の本は敬語の正しい使い方止まらず、敬語の自己診断テストまでついている)。一方、韓国では目上の者に対して正しい敬語を使えなかった場合にはパンマル(半語)を使ってその人を侮辱したという非難を浴びて、対話者同士の喧嘩の種になることがあるようだ。それほどまでに重要な敬語を言語学では比較分析の対象にされてはいるが、異文化コミュニケーションの研究ではさほど取り上げられていない。何故なのか。恐らく、日本と韓国とが一般的に言って言語的にも地理的にも似て近いために、単に対話者同士が両国語を充分学べば誤解も生じなくなると思っているからであろう。似ている文化と言語であるがゆえにバイリンガルまたは学習の結果それに近くなれば、何の問題もなくコードスイッチが簡単であると思われているのだろう。もしくは、この問題は日本語教育と外国語教育に属する問題としてよそに下駄を預けた形になっているのだろう。しかし、一般に思われているほどに日韓のコミュニケーションは容易ではない。高は日韓の文化人の間で行なわれた座談会「日韓理解への道」で敬語がこの二つの文化間の異文化コミュニケーションの問題になっていることを指摘している(1991、P.108)。

そうしたこと〔敬語を正しく使うこと〕も、二つの民族が話し合う場合、難しさを増す要素になっている。お互い、英語や中国語で話せば、これらには敬語がないに等しいから、そういう難しさからは逃げられましょうが。

韓国語に敬語があることを初めて知る者にとってはこの発言もむしろ日本語にも韓国語にも敬語があるのだからそれは日韓コミュニケーションの潤滑油になれるのではないかと思うに違いない。しかし、ことは逆のようだ。よって、拙論では敬語の違いが日韓の異文化コミュニケーションにどのような問題をもたらすのかを検討し、その解決策を提案する。

1. 「相対敬語」イコール「複雑」と「絶対敬語」イコール「単純」という誤解
先ずは、両国の敬語がどのように違うかを概観する。池と森下は「日本語と韓国語の敬語」の中でこう述べている（1991：P. 11）。

日本語は、話題の人物または聞き手が、話し手より目上であっても話し手の側に属していれば、敬語を使わない。また話題の人物または聞き手が、話し手よりも目下の人であっても聞き手の側に属していなければ敬語を使うという特徴をもっている。これに対して、韓国語は、話題の人物が聞き手よりも目上の人であれば、たとえ身内であっても、聞き手に対して敬語を用いて話す。また、話題の人物が子供であれば、たとえ聞き手の身内であっても敬語は使わない。これが日本語とちがう大きな特徴である。

日本語は「相対敬語」を、韓国語は「絶対敬語」を使用している。このような言語学的記述はややもすると先述の「日韓のコミュニケーションに問題なし」の感を強めることになりかねない。「相対」と「絶対」の言葉だけをを比べると、後者の方が単純であるとの印象を与えてしまうからだ。つまり、融通のきく「相対」（日本語）の方から「絶対」（韓国語）の方に調節するのはとても簡単であると思われるのだ。逆に言えば「絶対」から「相対」の側に移行するのは難しいとの思い込が生ずることになる。しかし、本当にそうなのだろうか。試しに、上の説明を具体化して日本語話者が自分の父の外出中に電話がかかってきた時の韓国式の絶対敬語で応対する場面を考えてみたい。「すみません、

お父様は外出していらっしゃいます。」日本語を母国語とする者がこの発話を解釈するならば、文脈を限定して考えて電話の受け手が義理の父に対する遠慮から出た誤りであると解釈する以外に、全く「おかしくて」言えないと思うに違いない。よって、「相対」から「絶対」へは「複雑」から「単純」への移行とは異なることがハッキリ分かる。今度は同じ状況で電話の受け手が韓国人で、日本式の相対敬語で対応する場面を想像してみる。「チェソンナムニダマン、アポジヌンオプスムニダ」（すみません、父は外出しています）。これも文化的に「父を父とも思わぬ者」の発話だと誤解されてしまう。「外出しています」では第三者の前で自分の父親は尊敬すべき父親ではないと口外するようなものだ。よってこの発話は韓国語を母国語とする者にとっては情形的に無理なことが分る。日本人には韓国人の中にも絶対敬語を使わなくても良いと思っている者がいるのではと疑う者もいると思うが、このような疑いは韓国儒教の徹底度を傍証としていくつか挙げることで情形的に解消できると思う。荒木は韓国の長幼の序の徹底度を韓国国会議員選挙法の、第132条を挙げて説明している（1992, P. 18）。

第132条（地域区当選人の決定）① 地位区選挙管理委員会は当該地域区で有効投票数の多数を得た者を当選人として決定する。ただし得票数が同じ地域区候補者が二人以上いるときは年長者順に従い決定する。

この例が意味することは長幼の序は単なる道德意識に留まらず、政治・法律道德まで浸透しているということだ。韓国のお年寄りが「礼儀知らず」だと評価する日本人もいるが、「バスの中で席を譲ってもお礼を言わない」という類のことが原因のようだ。しかし、これは異文化を自国文化で読み違えているのだ。日本の甘い「長幼の序」の程度で韓国の徹底された「長幼の序」を読み違えている。因みにこの場合韓国の老人は「オーニャ」（よーし）と言うだけで、やはり「ありがとう」とは言わないようだ（平井、1993、P. 59）。韓国の絶対敬語はこのように徹底された「長幼の序」の中にある重要な要素であり、絶対敬語から逸脱することは「長幼の序」を崩すことと同様に「不道德」なことに等しい。以上のことから敬語が両文化でいかに重要な地位を占めていて、どちらも文化的規範から離れる（絶対敬語から相対敬語、または相対敬語から絶対

敬語への移動) 融通性はないことが分かる。

しかし、この敬語に関する問題を掘り下げてみると、実際の問題は同一文化内では言葉の使い手が言語と文化の不可分性を日常的に認識できないことにある。その結果、言語と文化という不可分な有機体の敬語という要素を文化を持たない数式の要素、 $A+B+C+D=E$ と同様に見なして、左辺(相対敬語)と右辺(絶対敬語)をほぼ同値であると見なしている。言語形式上の小さな差異は文化的意味において大きな違いをもたらすことが分からずじまいになっている。実は我々は同一文化内でも敬語の誤りに止まらず、言葉使いの誤りから生じた誤解を経験しているのだが、恐らく「たかが形式上の誤り」であったかのように問題の原因を一笑に付してしまうのである。このようなことが似た者同士の意識の強い日韓コミュニケーションでも起こっているのではないだろうか。次に日韓の敬語の問題をコミュニケーションの理論に沿って考えてみたい。

2. 発話のストラテジーにもたらす問題

フィッシャーは発話のメッセージの志向性を中心に六つのタイプに分けている(1987)。

- (1) 自己志向型ストラテジー
- (2) 他者志向型ストラテジー
- (3) 関係志向型ストラテジー
- (4) 状況志向型ストラテジー
- (5) 目標志向型ストラテジー
- (6) 問題志向型ストラテジー

平井(1994)はそれぞれに説明を加えているが、それにさらに手を加えてこの六つのストラテジーを拙論の論点を明らかにするために適用してみる。(1)はまさに、発話者が自身の言動及び行動を説明するものである。例えば、「君のことをやり手だと言ったのは、君の手腕を評価してのことなのです」という表現は、発話が誤解された時に、よく用いられる。(2)は発話者が聞き手の言動に対して向けられるものである。この種の発話は日常最も一般的に用いられ

ていて、往々にして話し手自らの発話が聞き手に対して向けられていることに気づかないこともある。例えば、「そんなことするもんじゃない」の主語抜きの発話は咎めの意図がない一般論のつもりで出た言葉でも、聞き手へ向けられた発話と解釈される可能性もある。(3)は聞き手と話しての関係に焦点を置いた発話である。例えば、親しい者の間で秘密を打ち明ける場合によく耳にする言葉、「君と僕の仲だから思い切って言ってしまうよ」が該当する。他人には頼みにくいことを持ち出す場合にもこの種の戦略はよく用いられる。(4)は発話の状況に焦点が絞られている。例えば、「こんな場所ではなんだから」といって場所変えをする時によく耳にするものである。(5)は話し手と聞き手の目標を強調した発話である。例えば、意見が一致しないために建設的な結論が出ない時によく耳にする、「お互いに目的は同じなのだから、独自の方法で先ずは仕事を始めてみよう」がそれである。(6)は発話の焦点を問題にして、それに絞ることだ。例えば、話し手と聞き手の論議が個人攻撃に脱線する時に、それを建設的な話し合いに戻す時に出る、「問題はお互いをよく理解する方法を考えることであって、お互いの非を攻め合うことではない」の種の発話である。

上の六つの戦略は現実に行なわれているコミュニケーションでは、それぞれが一度のみ用いられて他は排除されるというものではない。例えば、誤解された話し手が(1)の例に挙げた発話を使用してコミュニケーションを終えることは稀で、後(4)の例の発話を使う場合がある。ようするに、現実には一つのコミュニケーションの目的を達成するために複数の戦略が用いられるということだ。この現実を踏まえた上で日韓コミュニケーションの敬語の問題の検討を深めて行きたい。例えば、目上の韓国人Kと目下の日本人Nが日韓の相互理解を深めるために韓国語式の敬語に従って話しをする場面を考えてみよう。

K：「我々はお互いにもっと親しくならなければいけない」

N：「その通りだと思います」

K：「先ずは、お互いの文化をもっと知る必要がある」

N：「具体的にはどのようなことをお考えでいらしゃいますか」

Kの最初の発話は目標志向型のストラテジーを使っているが、敬語の観点からは常態である。それに対してNの発話は他者志向型のストラテジーになっているが、尊敬語を使用している。Kの次の発話は同じストラテジーと同じ常態表現である。Nの次の発話はどうだろうか。Nは依然として同じストラテジーを使っているが、「お考え」という丁寧語と「いらっしゃる」という尊敬語を合わせ使っているので、尊敬の度合いから言えば、さらに高いことが分かる（目上の者に単に口をきくだけでなく、何かを依頼するわけだから当然の結果である）。このようにコミュニケーションは深まっても敬語の不均衡状態が続けばNはKが表面上は目的志向型のストラテジーを用いているが、実は暗に上下関係を浮き立たせる関係のストラテジーを使っているかのように誤解しかねない。さらに、Kの提案はお互いが親しくなることなのでNにしてみればKの発話は積極的に親しさを促さないで、自己矛盾だと思える。しかし、Kにしてみればこの会話の流れは至極当然のことなので、Nの思いなど知る由もない。それでは、上の会話が日本語式の敬語に従うならばどうなるか。恐らく、次のような変化を見せることになるだろう（勿論、絶対にこのようになるということではなく、このようになっても日本語の会話の基準から特に失礼にならないということだ）。

K：「我々はお互いにもっと親しくならなければいけない」

N：「その通りだと思います」

K：「先ずは、お互いの文化をもっと知る必要がある」

N：「具体的にはどのようなことを」

ここで注目すべき点は日本語式の敬語法に従えば、Nの2番目の発話では韓国語式の敬語法の場合よりも尊敬の度合いが低くなっていることだ。これはNにとっては至極当然なことなのだが、Kにとっては逆で不自然で礼を逸脱したことになる。発話のストラテジーに沿って解釈するならば、KにとってNの発話行為は最初は目的志向のストラテジーを取りながら、すぐさま同等であることを意図した関係ストラテジーに豹変したことになる。

ここでは絶対敬語式と相対敬語式にコミュニケーションを行った場合を話し手にも聞き手にも言語形式上かなりハッキリした発話のコミュニケーション・

ストラテジーを中心に会話分析をしたわけだが、両方に共通する問題は聞き手にとって話し手の発話の意図が信用できなくなることだ。すなわち、聞き手は「発話者は常に発話のストラテジーとは別のことを伝えようと試みている」と、コミュニケーション自体に不信感を抱く可能性があるということだ。ここでは発話中心のコミュニケーション・ストラテジーによる分析を試みたが、コミュニケーションに従事する者同士の人間関係に注目した関係理論（Relational Communication Theory）で解釈しても同じことが言える（この理論の説明はLittlejohn, 1983, p. 164-173を参照）。この理論の基本概念はコミュニケーションに従事する者同士の関係はコミュニケーションそのものによって定義され、またその人間関係がコミュニケーション自体を規制するし、全ての発話は二つのメッセージ、「レポート」と「コマンド」を持っているということだ。レポート・メッセージとは発話そのものの意味である。先述の例に従えばKの「お互いに親しくなることへの提案」、Nの「Kの提案に対する賛同」、Kの「お互いの文化をもっと知る必要性の指摘」、そしてNの「Kのその提案に対する質問」がそれである。コマンド・メッセージとは発話の規定する人間関係である。初めの絶対的敬語式の会話の例を見てみよう。Kの初めの発話は「対等な関係」、それに次ぐNの発話は「対等な関係」、二番目のKの発話は「対等な関係」、それに次ぐNの発話は「Kが上でN自身が下の関係」である。次の相対的敬語の会話はどうなるだろうか。二つの会話の場面の唯一の違いは最後のNの発話のコマンド・メッセージ、「対等な関係」である。このように、どちらの敬語方法に基づいてコミュニケーションを行っても誤解が生ずることが分る。

3. 敬語に対するエスノセントリズム

誰しも自分の文化は他に比べて優るものだと思いがちである。その文化が生んだ自国語ともなると特にそうであろう。その言語の中の最も重要な要素である敬語のこととなるとさらに拍車がかかる。日本語の敬語システムの方が韓国語のそれより優れている、またはその逆であるとの思い込みを「敬語に対するエスノセントリズム」と呼ぶことにする。この心理は絵空事ではなく、実際に日韓のコミュニケーションに長期に渡って従事したものでも持っていることに注目すべきである。韓国で日本語教師を長期に渡って勤めた者の感想を挙げる

(柳：1993、P. 97-98)。

敬語というと、封建時代の残滓というように考えられがちだが、今日の日本の敬語のように「上下の敬語」ではない「内と外の敬語」は民主主義と矛盾するものではなく、社会生活を円滑なものにする潤滑油の役割を果たしているとも考えることもできるだろう。それに対して韓国の敬語は、前述したように「上下の敬語」である。家の中では、子供は小さい時から親に敬語を使う。学校では生徒や学生は先生に、会社では部下が上司に、知らない人同士では若者は年長者に、必ず敬語を使わなければならない。まさに封建時代の残滓そのものである。

ここには相対敬語は絶対敬語より質的に勝るとの思い込みがある。しかし、この判断は拙速で、明らかに誤りである。例えば、相対敬語が民主主義的だとする主張の妥当性を日本語の敬語の例で考えてみよう。日本語では上司の子供にも敬語を使うことが一般的だが、人格も確立されていない子供に敬意を示すことがどのような意味で民主的かというとはなはだ疑問である。一方、韓国語では同じ場面では敬語を使わないのが当たり前とされる。この点についてはむしろ韓国語式の方が民主的である。また、「日本語の」敬語は相手に敬意を表すためだけに使用されるものでもない。例えば、杉戸は日本の会社内では男性上司は男性の部下に対してよりも女性の部下に対して頻繁に敬語を使うことを報告している(1986, p. 8)。その理由はこの二人の関係は上司と部下の関係で他の何ものでもないことを第三者にハッキリと印象づけるためらしい。韓国語の敬語が実際に同様に使われることがあるかは分らないが、どちらかの敬語が民主的であり優っているかの議論が無意味であることを知るのにはこれで充分であろう。しかし、前述の通り我々は敬語を自国語の中で一番大切なものであると思っているし、それが自国文化を自国文化たらしめている優れたものだと強く信じているのである。皮肉なことに少々韓国語の学習を続けると、日本語は話者自身を低めて相手を立てる敬語法があるが、現代韓国語では謙讓語が使用されなくなりつつある、ということを知るようになる(池、森下、1991, p. 159)。さらに、日本語の敬語の歴史を概観すると分かるが、国語審議会は昭和27年にこれまでの敬語を「基本的人格を尊重する相互敬語」への改革を促

している（古田，1989，p218）。また、それ以前は日本語も絶対的敬語を少なからず使用していたとの報告がある（茨木，1990）。竹内は関西では「自分の親にも敬語をつけて話すことがある」と述べている（1995，p. 212）。このような違いについても誤った価値判断がなされれば、絶対敬語は一昔前の洗練されない田舎のものであるかのように思われてしまうのだ。しかし、これらの違いをもって日本語の敬語が「民主的」だとは言えない。むしろ相手への敬意を表すことのみならず焦点を絞って、話者自信が誇りをもって謙讓語を無くす方向に進んでいる絶対敬語の方が民主的であるとの論も成り立つ。いずれにせよどちらの敬語法が優れているとの見方は無意味であるし、より良い日韓コミュニケーションの弊害にしかならない。

既に同一文化内のコミュニケーションの経験のみでは言語の持つ文化的意味を理解する可能性に乏しいと指摘したが、日韓の異文化コミュニケーションの機会に数多く恵まれた者でも敬語に対するエスノセントリズムを払拭できないでいる。それほどまでに敬語に対するエスノセントリズムは強いと言えよう。また、ここでは日本語の相対的敬語を韓国語の絶対的敬語より優れていると見る誤解についてだけ論じたが、逆に韓国語の絶対的敬語の方が「敬語本来のあるべき姿」だと思いつく誤解もあるに違いない。では、この種のエスノセントリズムは他にどこから学習されたものか、それについて考えてみたい。

4. 英語学習中に陥る敬語に対する誤解

多くの日本人または韓国人がお互いの間の異文化コミュニケーション以前に、別の異文化コミュニケーションに直接または間接的にかなり膨大な時間をかけて従事している。その内の多くが日米間と韓米韓の異文化コミュニケーションである。さらにその内の多くの時間が英語学習で占められている。その初期の段階でアメリカの英語には敬語に当たるものがないことを知る（厳密に言えば、全くない訳ではない。『英語の敬意表現』を参照）。母国語と英語の音声の違い、また統語法の違いの発見の驚きもさることながら、この敬語がないということの発見の驚きはいずれをも凌ぐに違いない。例えば、日本人ならば初期の英語学習の段階で英語には目上にも目下にも“You”という二人称しかないことに少なからぬ衝撃を受けたに違いない。さらに、親しくなれば英語では目上の者をもファーストネームで名指しにすること、時には子供が両親をファースト

ネームで呼ぶこと、依頼者が頻繁に“please”を使わないこと等も学んでいく。このようにして英語学習者は多大な擬似的異文化コミュニケーションのショックを受けたに違いない。それと同時にナイーブな学習者は英語に敬語のない理由を自らか、または教師から学ぶことになる。筆者の初期の英語学習の経験を省みれば、教師からか自らの学習であったかは判然としないが、「アメリカは平等の国であるから、敬語がない」と学んだ。中野はこのような説明は英語の待遇表現とその人間関係の適用のありかたの理解をむしろさまたげる働きをするのではないかと疑問視している（1982）。このような学習・教育過程では多くの日本人が英語的な表現イコール進歩的、日本語の敬語イコール封建的という心理的図式を獲得することになる。このような誤解がさらに進めば言葉のやり取りが頻繁になり目上の者とも親しくなれば敬語抜き、またはファーストネームで語り合えるようになる、それが理想的な異文化コミュニケーションであるとの観念を抱くようにもなるだろう。しかし、韓国語を媒体にした日韓コミュニケーションでコミュニケーションが進行するに伴って絶対敬語から相対敬語に変わるであろうか。既に述べたように答えは否である。変わらないから絶対敬語なのだ。その現実には直面した者の多くが柳（1993）のような誤解を持つようになるのであろう。ここで根底となる問題は敬語が変化しないから人間関係も深まらないと結論づけるところにあるのだ。言語項目上の変化はなくともコミュニケーションが進行するに連れてそれに従事する者同士の心理的距離が近くなることもありうるのだ。日本語の名詞の「先生」などは端的な例である。日本語のコミュニケーションでは二人の間が親しいものであっても「先生」という呼称名詞が使われてもおかしくない、むしろそれが普通であろう。親しい者同士の言語の特徴はさまざまであろうがコミュニケーションのトピックの豊富なこともその一つである。因に筆者の出合った日系三世の米国人は彼の行き来する日本人コミュニティーのいたる所で筆者が「先生」と親しげに呼ばれることが理解できないようであった。彼にしてみれば筆者が会う日本人の誰もかつて筆者の生徒であったことはなく、まして筆者の名前を正確に覚えている日本人が職業名で筆者を「呼び捨て」にすることが不可解だった。英語の常識では相手を職業名で呼ぶと失礼になるか、親しさを伴わないかのどちらかである。このように親しさと尊敬の念は英語の呼称名詞には同居できそうにもないが日本語では可能なのだ。古くなって現代では廃れてしまったが、『広辞苑』によ

れば「阿父」や「阿母」もそういう可能性のあった呼称名詞である。このように誤った英語学習を続けていけば日本語コミュニケーションで価値を置かれていることが学習者の意識の中から陰を潜める危険性もある。その誤った母国語感が韓国語とその文化感を歪めてしまうのは当然の結果であろう。

この章で述べてきたことの傍証として、再び筆者の経験を例に取ることにする。筆者がオーストラリアを旅した時のことだ。日本人の旅行業者から事前に「オーストラリアではチップの習慣はございませんので、ご安心下さい」と説明を受けた（日本と同じですから緊張しないで下さいとの気配りからの助言であった）。それにも拘わらずアメリカ滞在期間が長く現在でもアメリカ人との接触が多い筆者はシドニーに滞在してタクシー料金がメータに現れる度に適当な額のチップのコインを握りしめていた。筆者の滞米経験を英語学習と捉えるならば、この経験が物語るのは我々は初めて触れた異文化経験で獲得した知識と感性を基に第二、第三の文化の人々と接触するということだ。次に暫定的ではあるがより良い日韓コミュニケーションのための提案をして残された課題を検討したい。

5. まとめ

拙論では日韓コミュニケーションの問題と敬語の問題とが如何に深く関わっているか以下の順序で論じた。(1) 韓国語の絶対敬語と日本語の相対敬語は言語形式上前者の方が後者より単純なことは明らかであるが、一方が他方より使い易いということではない。その形式はそれぞれの文化で逸脱を許さないように「文法化」されている。(2) 絶対敬語か相対敬語かのどちらかを日韓コミュニケーションで用いた場合にどのような問題があるかを論じた。発話者のコミュニケーションストラテジーが会話者同士の上下関係を崩そうとするものと誤解されて、コミュニケーション自体に対する不信感がつのる恐れがある。(3) 人は自国の文化に対するエスノセントリズムを持っていて、それが如何に深くそれぞれの敬語にも関わるかを指摘した。日本語の歴史や韓国語の現状を概観するとあたかも日本語の敬語の方が韓国語のそれよりも優れているかの如く誤解する。この誤解とエスノセントリズムは深く関わっている。(4) 英語学習中に得た誤った知識が日本語と韓国語の敬語に関する歪んだ考え方を導く可能性がある。英語のコミュニケーションでは親しくなればお互いの呼び名

がファースト・ネームになっていくために、これが全ての異文化コミュニケーションの理想であると勘違いしてしまう。次に暫定的ではあるが、よりよい日韓コミュニケーションの為の提案に移りたい。

第一の提案。相対敬語と絶対敬語の再認識を促す。相対敬語が絶対敬語より民主的で優れているという誤解を解くこと。既に相対敬語が絶対敬語より優れているという論理は相対敬語内の観察のみでも非合理であることを述べた。第二の提案。津田は『英語支配からの解放を目指す新たな意識確立のための21の提言』をしている(1991, p. 1982)。この提言の全てに賛同することはできないが、英語を無批判に学習することが如何に日本人自身の異文化コミュニケーションを困難にしているかの指摘は評価できるところである。津田の提案と先述の「英語学習中に陥る敬語に関する問題」とを併せて第二の提案をする。英語教育はこれからも異文化コミュニケーションを念頭に入れて行っていくこと。近年に於いてそれは盛んに行われているわけだが、ここで「異文化コミュニケーションを念頭に入れる」とは日米間及び韓米間の異文化コミュニケーションに留まらない、第二、第三の異文化間のコミュニケーションを考慮した英語教育ということだ。『異文化理解のストラテジー』(佐野, 水落, 鈴木, 1995)のように英語教育を異文化コミュニケーションの観点から捉えた本もあるが、これも第二、第三の文化を念頭にいたものではない。具体的には、先述の初期の英語学習者に対する英語の二人称を日本語や韓国語の敬語法との関わりで説明する場合、敬語に対する過剰なエスノセントリズムを生み出さないように、英語との対比のみに留まらず、世界の文化の多様な価値観に立ち説明することだ。拙論では日韓コミュニケーションの敬語の問題に焦点を置いたが、言葉の一側面を断片的に捕えて日韓コミュニケーションの誤解を全て解くことはできない。ミクロレベルとマクロレベルの検討が必要である。例えば、マクロレベルの観察として、このように絶対的敬語を常用する韓国語であるにも関わらず「韓国人は日本人よりはるかに自己主張が強い」と言われているが、加瀬はこのような日本人と韓国人の違いを両国の国語の違いだとまで述べている(1990, p.132)。林もまた日本人とアメリカ人よりは韓国人とアメリカ人の方がコミュニケーションが旨く行くと言っている(1982, p. 274-275)。これも、韓国人は日本人よりも思いを隠さずストレートに話しをする、つまり「米国的」自己主張の重要な一要素を備えているという観察から述べているこ

となのだ。コミュニケーションは通常二人以上の構成員から成り立っている。その構成員の中に年齢の差があることはよくあることである。そのような状況で長幼の序を守りながら自己主張を行うことは一見矛盾することのように思える。もし、見聞する「韓国人は自己主張の民族である」という見解が正しいならば、この方面の韓国人同士のコミュニケーション技術を参考にすることによって自己主張が下手だとされる日本人のコミュニケーション技術も豊かになる可能性があると思う。

参考文献

- 荒木博之（1983）『敬語日本人論「礼」の言葉－敬語から日本的集団のダイナミズムを探る－』PHP研究所
- 荒木和博（1992）『愛し哀しき韓国よ』亜紀書房
- 古田東朔（1989）「近代の敬語」古田東朔編『日本の言語文化』放送大学教育振興会 212-229
- 平井久志（1993）『ソウル打令』徳間書店
- 林建彦（1982）『近い国ほど、ゆがんで見える』サイマル出版会
- 平井一弘（1994）「コミュニケーションのしくみとはたらき」本名信行，ペイツホッフア，秋山高二，竹下裕子編『異文化理解とコミュニケーション－1』三修社 29-50.
- 茨木のり子（1989）『ハンゲルへの旅』朝日新聞社
- 池景来、森下喜一（1991）『日本語と韓国語の敬語』白帝社
- 加瀬英明（1990）『「恨」の韓国人「畏まる」日本人』講談社
- Littlejohn, S. W. (1983) *Theories of Human Communication* (Second ed.), Wadsworth Publishing Company, Belmont, California.
- 中野道雄（1982）「発想と表現の比較」国広哲哉編『日英語比較講座：第四巻 発想と表現』大修館書店 33-65.
- 新村出編『公辞苑』岩波書店
- 野本菊雄（1994）『敬語を使いこなす』講談社
- 奥山益朗（1972）『日本人と敬語』東京堂出版
- 大石初太郎（1986）『敬語』ちくま文庫
- 大杉邦三（1982）『英語の敬意表現』大修館書店
- 高、鮮、金、森、司馬（1991）『日韓理解への道』中央公論
- 津田幸男（1991）『英語支配の構造』第三書館
- 辻村敏樹（編）（1992）『敬語の用法』角川書店
- 柳智尚（1993）『韓国病診断』亜紀書房

Summary

Intercultural Communication Between Japanese and Koreans: Significance of Honorifics

Madoka Kanemoto

Within intercultural communication between Japanese and Koreans, which honorific system to use is a serious problem. Koreans use what is called absolute honorific system, in which those who are regarded high in that culture are referred with honorifics in any situation. However, Japanese use what is called relative honorific system, in which those who are regarded high in that culture are referred without honorifics in the presence of outsiders. Naive views prescribe that switching from Japanese to Korean honorific system or vice versa is as simple as code-switching and simply using one over the other will solve the problem, however; this paper claims the opposite. The paper also proposes that the English education in both countries should emphasize intercultural communication as a whole, not limiting it to intercultural communication between their respective culture and English speaking countries, so that it might be possible to wipe out the illusion of language ethnocentrism that one honorific system is superior to the other.